

Title	「いかにも」の歴史的変遷
Author(s)	松本, 朋子
Citation	日本語・日本文化. 2011, 37, p. 1-23
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/6868">https://doi.org/10.18910/6868</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈研究論文〉

## 「いかにも」の歴史的変遷

松本 朋子

### 1. はじめに

現代語では、次のように「いかにも」という形式が用いられることがある。

(1) 潔く罪を認める彼の態度はいかにも男らしかった。

『現代副詞用法辞典』には「いかにも」の意味は二つ挙げられている。一つ目は、(1)の例を挙げ、「述語に示される状態の、典型的な状態に合致している」と説明されるものである。(以下、この用法を「典型一致」とする。)二つ目は、

(2) いかにもおっしゃる通りです。

という例をあげ、「相手の言うことを無条件で肯定する様子を表す」と説明されるものである。現代語では、「いかにも」は大きく分けてこの二用法で用いられている。

遡って古代語を見ると、「いかにも」は中古から用例を見ることができる。

(3) 此の、のたまふ、「宿世」といふらんかたは、目にも見えぬ事にて、いかにも△、思ひたどられず。 (源氏物語・総角・4-415)

(3)は、『源氏物語』の例であるが、「いかにも」は否定文で用いられ、「この宿世というような方面の事は、目にも見えない事なので、どうしてもこうしても、思い辿ることができない」という意味で、下に続く不可能の表現を修飾している。注目したいのは、現代語での「いかにも」は「典型一致」の副詞や応答表現で用いられるのみで、(3)のように不可能の表現と結びついて用いられることはない、という点である。

(4) \*いかにも、思いたどることができない。

このことから、「いかにも」は何らかの変遷を遂げ、現代語のように用いられるようになったと考えられる。

「いかにも」の歴史的変遷についての先行研究には、中川(2007)があり、「い

かにも」がかつて、現代語にはみられない、否定、意志、願望、といった様々な表現と結びついて用いられたことが注目されている。中川（2007）では、「いかにも」の用法の変遷について、文法化、主観化という理論的な枠組みを用いて説明を試みており、興味深い指摘もある<sup>1)</sup>。しかし、「いかにも」がどのようにして否定、意志、願望といった多様な用法と結びつくのか、またその用法間にはどのような関連があるのかについては、不明確な点が残る。

そこで本稿は、「いかにも」が変遷する間に多様な用法がどのように現れるのか、また、それらの用法の相互の関連を明らかにすることを目的とする。また、「いかにも」の変遷と他の不定語の形式との関連についても併せて考察していく。

## 2. 「いかにも」と「否定」「任意」

管見の限り、「いかにも」の最も古い例は『土佐日記』（935年頃成立）に見られる次のものである。

(5) あしくもあれ、いかにもあれ、たよりあらばやらん。」（土佐日記・34）  
これ以降、「いかにも」の用例は、様々な資料にまともって見ることができる。ここでは、「いかにも」の比較的早い段階での様相を知ることができる<sup>2)</sup>。

用法の枠組みには、中川（2007）での記述や、尾上（1983）による現代語の不定語の分類を参考にした。具体的には、「いかにも」がどのような述語と結びつき、どのような意味で用いられるかによって、大きく「否定」と「任意」の二つの用法に分ける<sup>3)</sup>。ただし、中川氏は、本稿でいう「否定」用法の一部を、「より主観的な意味へとシフトしている」ものとして、同じく後述する「任意」用法の後の段階に位置づけている。しかし本稿では、この「否定」の二タイプに用例の見られる時期にさほど前後がないことや、不定語の性質（後述）から、一旦これらを並列のものとして扱って差し支えないと考える。

### 2.1 「否定」

まず、「いかにも」は、次のように用いられることが多い。

(6) a いかにも  御子のおはせぬ事をいみじうおぼし歎くに、

（栄花物語・巻第二・1-80）

b いと物恐ろしうて、いかにもいかにもえ動かれ給はぬを、

(狭衣物語・巻三・下180)

(6) ab では、「いかにも」が否定文の中で用いられている。(6) aは「帝も御位におつきあそばして長年におなりなので、今は讓位なさりたくおぼしめすけれど、どうにもこうにも御子のいらっしゃらないのをたいそう苦にしておられたところ」、(6) bは「大変恐ろしくて、どうしても動くことができない」という意味になる。この場合の「いかにも」は「様々な手段をつくしたが」のような意味になると考えられる。そして、後続する「事態が成立・存在しない」という否定表現の述語を修飾している。以下、この用法を「否定」と呼ぶ。

## 2.2 「任意」

2.1 でみた「否定」の他に、「いかにも」は次のようにも用いられる。

(7) a 「いかにもあれ人の來ん、かくなんと申せ」とのたまひて、今日は寢殿におはす。  
(宇津保物語・楼上下・3-554)

b 「己が行末も残少ければ、いかにも〓して、いかで後やすくと思ひきこゆるに、この宮邊りにかくせちに宣はすめるを、いかにおぼす」と聞え給へば  
(栄花物語・巻第十四・1-420)

(7) a では「いかにも」には「あれ」という形が続き、「どんな人であれ、人が来たら、来たとしらせよ。」と大将が命じている場面である。(7) b では、「して」という形が続き、北の方が姫君にむかって「私のこれからも残りわずかなのですから、どのようにしてでも安心のゆく御身の上にしてあげたいと思い申ししていたのに、……」と話している場面である。「いかにも」の部分は、「どんな場合であれ」とか「手段を選ばず、どのようにもして」という意味になる。このように「たとえどのようであっても、(結論にかわりはない)」といった意味で「いかにも」が用いられる場合を「任意」と呼ぶ。

用例 (7) に再び注目すると、「いかにも」は「いかにもあれ」「いかにもして」という句を形成し、後ろには、次にあげる波線部のような表現が続いていることに気づく。

(8) a 「いかにもあれ人の來ん、かくなんと申せ」との給ヒて、今日は寢殿におはす。  
(宇津保物語・楼上下 用例 (7) a 再掲)

b 「己が行末も残少ければ、いかにも／＼して、いかで後やすくと思ひきこゆるに、この宮邊りにかくせちに宣はすめるを、いかゞおぼす」と聞え給へば  
(栄花物語・巻第十四 用例 (7) b 再掲)

(9) 「何にまれ／＼あらん物を、いかにも／＼しなして、おほくはこの御ために物せむかし」といへば、  
(宇津保物語・俊蔭・1-66)

(8) a の波線部は、「人が来たら、来たお知らせください」という、相手に対する命令を表している。また、(8) b の波線部は、「是非心配のない身の上にしてあげたい」という、話し手の希望が続いている。また (9) では、「いかにも／＼しなして」という句が形成され「(なんでもかまわないので、)ただお家の中にあるものをなんとかして必要なものと交換して」という「任意」の意味になり、後ろには「このお産のために役立てましょう」(波線部)という意志の表現が続いている。このように「任意」で用いられた場合の「いかにも」は、しばしば「いかにもあれ」「いかにもして」のような形で、「たとえどのようなものであっても」「どのようにしてでも」という意味で、後続する命令、希望、意志などの表現を修飾する。命令、希望、意志はいずれも事態の実現を求めるものであり、総合すると「状態や手段、方法はどのようなものでもかまわないから、事態が実現してほしい」といった意味になる。

次のように「いかにも」が一語で命令、希望、意志などと結びつく例も見られるが、それは上に述べた性質に連続するものであろう。

(10) a 「いつかた」と、おぼし定まりて、いかにも／＼、おはしまさなむ」と、  
うちなげく。  
(源氏物語・浮舟・5-274)

b 昨日の御文にも、さもの給はせざりしものを。いかにも、参りて、尋ね侍らん」とて立てば、  
(狭衣物語・巻四・399)

(10) a は泣いている女君に対して右近が、「そんなふうにして、ただ悩んでばかりおられますと、物思いをしている人の魂は身を抜け出るものだから、それで母君の夢見も悪いのでしょうよ、どちらかお一方とお決めになって、あとは結果がどうなるうと、なりゆきにお任せなさいまし」と話している。(10) b は、突然尋ねてきた大将からの伝言を受けた姫君が、「どなたなのでしょう、しかるべき心当たりがありません。もしかしたら大将殿がいらしたのかと思いましたが、

昨日のお手紙にもそんな風には言っておいでではなかったのですが。ともあれ、西面に参上してお探してみましよう」と話している場面である。これらの例では、「いかにも」は用例(8)や(9)と異なり、一語で命令や意志について修飾している。しかし、この場合もやはり、「どのような場合であろうと、ともあれ」と、事態を実現させるための条件である手段や方法、状態などを「選ばない」という「任意」の意味がその背後にはあると考えて良いだろう。

### 2.3 「前提集合」と「否定」「任意」

2.1や2.2でみたように、古代語では、「いかにも」の多くが「否定」や「任意」で用いられる。調査した資料に見られる「否定」「任意」の用例数を表1に挙げる。

表中に「専一」としたものについては、3.で詳しく述べるが、それを除くと、用例のほとんどが「否定」または「任意」のどちらかで用いられていることが分かる。

このように、「いかにも」が「否定」「任意」とよく結びつく、という現象を考えるにあたり、奥津(1984)(1985a)(1985b)の一連の研究が興味深い。奥津氏は現代語の「どっち」をとりあげている。「どっち」は二者のうちから一者を選択する疑問文を形成するが、「どっち」による疑問文が成立するためには、前提として、相手が選択する可能性のある二つの項目が存在し、それが相手にも知られていることが必要である、としている。例えば、

- (11) コーヒート紅茶トドッチヲ飲ミマスカ? (奥津1984(3))

表1

	否定	任意	専一	計
土佐日記		1		1
蜻蛉日記	3	1		4
宇津保物語		4		4
落窪物語		2		2
源氏物語	8	6	3	17
和泉式部日記		2		2
栄花物語	2	4	2	8

という文では、「どっち」の部分に「コーヒー」と「紅茶」の二項目から成る集合の存在を前提とし、このような前提となる集合を「前提集合」と名付けている。さらに奥津氏によると、「どっち」以外の「誰」「何」などによる疑問文も、すべてこれら選択並列疑問文の延長として考えられ、文脈上具体的な要素が明示されていなくても、ある程度前提集合が存在することが想定されている。つまり、不定語は「不定・不明」の項目を示しながら、その答えとなりうる要素の集合を、「前提集合」として持っている、ということである。

不定語「いかに」を要素とする「いかにも」にも同様に、「いかに」によって問われるものの答えとなり得る要素の集合（前提集合）があると考えられる。そして、「否定」と結びつく場合は、助詞「も」の合説の働きから、前提集合の要素を全称的にまとめあげ、「それらの要素のすべてあてはまらない」と否定する。「任意」に用いられる場合は、例えば、

(12) この遊園地は、大人にもも子供にもも人気がある。

のように、「大人」「子供」といった対照的な意味の語を並べて、「それらを区別しないほど〜だ」ということを強調する、といった助詞「も」の働きによって、「その要素のうち、どれでもかまわない」という意味になるのである。

このように、「いかにも」が「否定」「任意」と結びつくという現象は、「いかにも」が不定語「いかに」を要素として持つ、という点から説明することができる。つまり、この段階での「いかにも」は、その構成要素である不定語「いかに」や助詞「も」の性格を色濃く残した形式である、といえるだろう。

### 3. 「任意」から「専一」へ

時代が下ると、「いかにも」は次のように用いられるようになる。

(13) a さはいかにもそこに知るべき人にこそありけれ。

(浜松中納言物語・巻の五・415)

b 此石は、いかにもやうある石なり。

(古今著聞集・高辨上人例人に非ざる事並びに

春日大明神上人の渡天を留め給ふ事・99)

(13) a は「それでは（この女は）なるほどあなたに知られるべき人であったのだ。」

(13) bは「この石は由縁のある石に違いない」という意味になる。(13) にあげた例は、いずれも平叙文で用いられており、先に見た「否定」用法の例ではない。しかし、「どれでもかまわない」という「任意」の意味でも解釈しがたいのである。(13) の「いかにも」は、いずれも「AハBナリ (ニアリ)」という名詞性述語を修飾している。そして、「AはBに違いない」という話し手の断定的な判断が、「いかにも」によって修飾されているのである。さらに、次のような例も「任意」用法では解釈しがたい。

(14) 尤この大路をこそとらせ給べきに、いかにもよけさせ給けり。

(古今著聞集・貞信公忠平棗を愛し式部卿親王家の棗木を自ら移植の事・492)

(14) は『古今著聞集』の例で、「何がなんでもひたすらお避けになった」という意味になる。「いかにも」は「よける」という動作について、「ひたすら(その動作を行う)」という意味で修飾している。

(13) では名詞性述語、(14) は動作性述語が「いかにも」によって修飾されているという違いはあるものの、両者に共通する「いかにも」の意味は、「ほかに選択肢が考えられず、(Aは)(ひたすら)Bとしか結びつかない」というものであろう。このような「いかにも」の用法を「専一」と呼ぼう。

1050年代以降の資料に見られる「いかにも」の用法別の用例数を表2に示す。表から、13節に挙げた表1に比べて、「専一」の例<sup>4)</sup>が増加しているのが分かる。

「いかにも」が「専一」用法で用いられるようになった経緯について<sup>5)</sup>、次のような例が興味深い。

(15) 長らふべき心地もせぬまゝに、おさなき人 $\wedge$ ”を、いかにも $\wedge$ わがあらむ世に見をくこともがなと、臥し起き思(ひ)歎き、(更級日記・531)

(15) の「いかにも」の部分に注目すると、まず第一に、「生き長らえる自信もなくなったので、幼い子どもたちの行く末を、例えどのようでもあれ、私のこの世にあるうちに見定めておきたい」と解釈される。この場合、「子どもたちの行く末」についての内容が、「例えどのようであっても(結論に変わりがない)」という「任意」の意味になる。しかし、それと同時に、(15) は、「老い先が長くないため、他の何よりも第一に……したい」という、第二の解釈も可能なのである。後者の場合、「いかにも」の部分は、「他には選択肢がない」という「専一」の意味に解

表 2

	否定	任意	専一	計
更級日記	1	1		2
浜松中納言物語	1	3	2	6
夜の目覚	4	2	7	13
狭衣物語	12	10	4	26
大鏡	3	1	1	5
讃岐内侍日記	1		1	2
梁塵秘抄		2		2
とりかへばや物語	4	1	7	12
宇治拾遺物語	4	12	4	20
古今著聞集	32	7	8	47

積される。

なぜこのように「任意」と「専一」は連続するのであろうか。そもそも「任意」とは、前提集合について、「その要素のどれを選択しても、結論は変わらない」とするものであった。これは、結論の側面により重きをおくと、「結論は変わらないので、選択にはほとんど意味がない」ということになる。ここから、「任意」の「いかにも」には、「選択そのものにほとんど意味がない」という意味が生じたのではないだろうか。さらに進んで、「ほかには選択肢がないほど確実に～だ」という話し手の「 $A = B$ 」という断定的な判断を修飾したり、「わきめもふらず、ひたすら（～する）」という意味で動作性述語を修飾する「専一」用法が生じたものと考えられる<sup>6)</sup>。

#### 4. 「典型一致」へ

##### 4.1 程度副詞化

さらなる「いかにも」の変化を見ていこう。

1592年に天草で刊行された、『平家物語』（以下、天草版とする）は、11世紀ごろに成立した『平家物語』を原拠として、成立当時の口語体で書かれたもので、

現存する『平家物語』諸本中、どの本が原拠本に最も近いかにについての研究が進んでいる。清瀬(1982)での研究成果に基づいて<sup>7)</sup>、天草版が原拠としたものに最も近いと考えられる『平家物語』本文(以下、原拠本とする)と天草版を比較していくと、天草版の「いかにも」には、次のような興味深い例が見られる。

(16) a 婿にとって、いかにも花やかに (icanimo hanayacani) もてなされた  
(天草版・7)

b 聳にとりて聲花(はなやか)にもてなされければ…… (覚一本・86)

(17) a 三年の愁嘆を送り、今はいかにも広い (icanimo firoi) 田の畝に捨てられて、足一つの身となつてござる：  
(天草版・69)

b 三春の愁嘆ををくり、今は廣田の畝に捨られて、胡敵の一足となれり。  
(覚一本・206)

(16) b (17) b が原拠本の本文で、それに対応する天草版の本文が (16) a (17) a である。原拠本と天草版を比較すると、新たに成立した天草版にのみ、「いかにも」が用いられているのが分かる。そこで、これらの例をさらに詳しく見ていくと、(16) a は「花やかに」(17) a は「広い」といった形容詞や形容動詞が「いかにも」の直後に現れ、「本当に花やかだ」((16) a)、「まったく広い」((17) a)などと解釈されることに気がつく。天草版で新たに「いかにも」が用いられた例は、全部で8例見られるが、そのうち、(16) a (17) a のように、形容詞や形容動詞が「いかにも」の直後に現れる例が7例と、ほとんどを占めているのである。さらに詳しく見ていくと、

(18) a 宗盛いかにも嬉しさうで (icanimo vrexisōde) 内に入られた。  
(天草版・118)

b 右大将ヨニモ訟ケニテ入り玉ヒヌ (百二十句本・261)

(19) a 溝のあったを宮のいかにも軽う (icanimo carū) ざっと超えさせられたれば、  
(天草版・109)

b 渠ノ有ケルヲ宮ノ窠 (イト) 物カロウザツト超サセ玉ヒケレバ……  
(百二十句本・250)

(18) a (19) a が天草版で新たに用いられた「いかにも」が、「嬉しそうだ」「軽い」といった状態性述語を強調している例である。原拠本でこれらに対応するのは

(18) b (19) bであるが、ここでは「いかにも」に対応する部分には「よにも」「いと」といった副詞が用いられている。天草版での「いかにも」は、これらの副詞と同様、「とても、非常に」といった意味で、後続する状態の程度を強調しているのであろう。つまり「いかにも」は、新たに程度副詞として用いられるようになった、と考えられるのである。

室町期の他の資料でも、「いかにも」は程度副詞として用いられている。

(20) a 盗人万民の中で、いかにも高声にののしったは、「わが母ほどの慳貧第一なもの世にあるまじい、わがこの分になることは、かれが仕業ぢや、……」  
(エソポのハブラス・476)

b 眼一眼ハイカニモ黒クアツタソ (蒙求抄・四・54ウ)

(20) aは『エソポのハブラス』の例で、「いかにも」は「高い」という状態を修飾し、「たいへん大きな声でののしった」という意味になる。(20) bは『蒙求抄』の例で、「眼はとても黒かった」という意味になり、やはり「いかにも」は「黒い」という状態を修飾し、程度副詞として用いられているのである。

室町期の資料に見られる用例について、「いかにも」の直後に形容詞や形容動詞といった状態性述語が現れるかどうか注目して分類したものが、表3である。表3では「いかにも」の直後には状態性述語が現れる例が圧倒的に多い。比較のために、室町期より以前の資料(表2)で「専一」とした例の直後に、状態性述語がどの程度現れるかを示したのが表4である。表4の段階では、「専一」の「いかにも」には、ほとんど形容詞や形容動詞が後続することはなかったことが分かる。

「いかにも」の「専一」用法から程度副詞への分化については、工藤(1983)

表3 「いかにも」の直後の状態性述語の有無

	有	無	計
蒙求抄	7	2	9
毛詩抄	30	5	35
エソポのハブラス	8	1	9
虎明本	14	8	23

表4 「いかにも」の直後の状態性述語の有無

	有	無	専一計
浜松中納言物語	1	1	2
夜の寢覚	1	6	7
狭衣物語	0	4	4
大鏡	0	1	1
讃岐内侍日記	0	1	1
とりかへばや	1	6	7
宇治拾遺物語	0	4	4
古今著聞集	1	7	8

※表2の「専一」の例を対象とする。

での「ほんとに・実に」「案外・意外に」などの形式についての記述が参考になる。氏によると、これらの形式は副詞として、「後続のことがら内容全体に対する真偽や予想との異同といった話し手の評価・コメントを表す用法」を持つと同時に、「形容詞と組み合わせたり、とくにその直前に位置する場合、程度性の意味をもたされることが多い」とされている。前者は「コトに対する評価副詞」であり、後者は「サマについての程度副詞」とされるが、両者は「サマに対する評価」を媒介として、交渉し、隣接する関係にあるのである。工藤（1983）は次の例を挙げ、両者の交渉を物語るものとしている。

(21) 「お前達、みんな脱走兵だぞ」と思い掛けなく大きな声で病人が言った。

(野火・工藤 1983 より)

(21) は、「「大きな声で病人がいった」コトが思い掛けないのか、「大きな」サマが思い掛けない(ほどな)のか、判定にまよう」(工藤 1983)もので、後者の場合、まさに「サマに対する評価」と程度副詞の両様に捉えることができよう。

「いかにも」の程度副詞化についても評価副詞と程度副詞の交渉として説明できる。例えば次に挙げるのは「いかにも」の「専一」の段階での例である。

(22) 人はいかにもなさけはあるべし。

(宇治拾遺物語・歌よみて罪をゆるさるゝ事・277)

(22) の「いかにも」の部分は、後続する「人にはなさけがある」という内容全体に対して、「なるほど、確かに（間違いなく）～だ」と、話し手が評価している評価副詞の例である。ところが、

(23) 太平ナ時分チャ程ニ起テ行テサテ雨カフルカイカニモノトヤカニフルソ  
 (毛詩抄十四・8ウ)

のように、「のどやかなり」という状態性述語が「いかにも」の直後に現れると、「確かに、間違いなくのどやか（という状態）だ」と、「専一」にも解釈されるし、「とても（大変）のどやかだ」という程度副詞の意味でも解釈されるのである。このような状態性述語（サマ）を評価する用法を橋渡しとして、「いかにも」は程度副詞へと分化したのだと考えられる<sup>8)</sup>。

#### 4.2 「典型一致」

さらに時代が下ると、「いかにも」は次のように用いられることが多くなる。

(24) a 朗々なる窓のもとに書読をりしも遙に輻歌の聞るはいかにも春めきてう  
 れし  
 (北越雪譜・196)

b 須河が世間に馴れざるゆゑ、百挙動がはんまにして、いかにも馬鹿気て  
見ゆるを見て、  
 (当世書生氣質・142)

これらは「めく」「見ゆる」といった形式が共起し、(24) aでは「春」、(24) bでは「馬鹿げている」という述語の「典型的な状態に合致する」という意味になる、「典型一致」用法の例である。

「典型一致」は、「他に選択肢がないほど、確かに……だ」という「専一」用法の中でも、対象の様態などと、その述語で表される「典型」を「Aは間違いなくBだ」と結びつけるもので、「専一」のひとつのバリエーションであると考えられる。

「典型一致」の例は、古くは室町期の資料にすでに見ることができる。

(25) a 爾之一急カシイ事カ有テイカル、カトスレハイカニモヒマアリサウニ車  
 ニアフラサイテイカル、ソ輪カキシル程ニ油ヲサス事カ有ソヒマノアル  
 時スル事ソ  
 (毛詩抄十二・42ウ)

b ある馬、岡の辺にでて草を食むところに、獅子王これを見て、くらはうとおもへども、「左右無う走り出るならば、あれも逃げうず、しよせん

武略をして近づかうずる」とおもひ、いかにも静かに柔軟なふりで馬の傍に歩んで来、「われはこのごろ医道を稽古した、其方は痛むところがあらば見せい、  
(エソポのハブラス・459)

(25) aは『毛詩抄』の例で、「暇がありそうに見える」という意味になり、(25) bは『エソポのハブラス』の例で、「わざと静かにやさしい様子をして」という意味になる。

近世後期から明治期までの資料について、「いかにも」の用法別の用例数を表5に示した<sup>9)</sup>。1800年代後半以降、程度副詞としては用いられることが少なくなり、これに伴うように「典型一致」の例が増えていることが分かる。(表中の「応答」については後述)

「典型一致」が、「専一」の中でもどのように位置づけられ、どのような経過で近代以降多く用いられるようになったのか、現段階では明確な見通しを持っていない。ただし、「典型一致」が「らしい」「ようだ」「～に見える」など、状態性にまつわる表現とよく結びつくのは、「いかにも」が程度副詞に分化し、状態性述語を強調することが多くなったことと何らかの関連があるだろう。「いかにも」は、「専一」用法から、一旦程度副詞に分化したものの、結局、程度副詞として

表5

	応答	程度	典型一致	その他	計
東海道中膝栗毛	1	1			2
北越雪譜	2	4	3		9
勸進帳	1		1		2
当世書生氣質		1	2		3
あいびき			2		2
浮雲			2		2
たけくらべ		2			2
金色夜叉	2	4	1	1	8
吾輩は猫である		3	5		8
阿部一族			1		1

は用いられなくなり、「専一」用法の一バリエーションである「典型一致」用法が生き残ったのではないだろうか。近代以降の「いかにも」の変遷については、さらに考察を続ける必要がある。

### 4.3 「応答」場面での使用

1682年成立の『好色一代男』には、次のような例が見られる。

(26) 「太夫戴け、やろう」といふ。此中では戴かれぬ所ぞかし。初心なる女郎は脇からも赤面してゐられしに、高橋しとやかに打笑ひ「いかにも戴きます」と、そばにありし丸盆に請て (好色一代男・巻七・176)

(26) は、相手の「やろう」という申し出に対して、「おっしゃるとおり戴きましよう」と肯定を示す応答の場面に「いかにも」が用いられている。(以下、このように「いかにも」が用いられる場合を「応答」と呼ぶ。) これ以前の資料では、「応答」で「いかにも」が用いられた例は見られず、管見の限りこれが文献に見られる比較的古いものである。

1792年成立の狂言台本『大蔵虎寛本』(以下、虎寛本)と、これより早く1642年に成立した『大蔵虎明本』(以下、虎明本)の「応答」が現れる箇所を比較してみよう。

(27) a (蚊の精) こなたの事でござるか

(太郎冠者) 中々そなたの事じやが (虎明本・かずまふ)

b (蚊の精) やあ／＼、こちの事で御ざるか。何事で御座るぞ。

(太郎冠者) いかにもそなたの事じや。 (虎寛本・蚊相撲)

(27) aが虎明本の例で、(27) bが虎寛本の対応する詞章を比較したものである。虎明本では「中々」とあるのに対して、虎寛本では、「いかにも」が用いられている。虎明本では「いかにも」が「応答」で用いられた例は全く見られないが、一方の虎寛本には52例と多くが「応答」に用いられている。虎明本に見られず、その後およそ100年後に成立した虎寛本で数多く見られる、ということは、「応答」での使用が、比較的新しいものであったことが伺える<sup>10)</sup>。さらに例を見ていこう。

(28) 彦六は「やい阿呆、おのれが有馬で云には、どれやら知らぬ女中がござって、働いてじゃと云たは此女の事か。」「いかにも其おみつ様でござります。」 (傾城壬生大念佛・83)

(28) は、彦六が、女房のおみつと再会する場面で、彦六が、長兵衛に向かって、「かつて（長兵衛）が会ったことがある、と話していたのはこの女の事か」と質問をしているのに対して、長兵衛が「確かに、そのおみつ様でございます」と答えているものである。この場合、「はい」「ええ」といった肯定の応答詞のように「いかにも」が用いられているようにも見える。しかし、彦六は長兵衛の既に知っている事柄を確認したいと思っており、長兵衛もそれに応えて「目の前の女はおみつである」ことが「間違いない」と、自らの中で再確認しているのである。このような例が見られることから、「応答」は、3. で見た「A はまさに B だ」という「専一」用法が、会話の中で「確かにそのとおりだ」と、自分自身の認識を確認しつつ、相手の発言への同意を表す場面に用いられるようになったもの、と考えられる<sup>11)</sup>。

「応答」の「いかにも」は、近世以降の資料にも多く見られ、一般的に用いられていたと考えられる。

(29) 小女「何じゃ、父様が不義をして。」彌五「いかにも。それ故旅宿へ連歸。  
家來共、乗物やれ。」 (韓人漢文手管始・415)

(29) は『韓人漢文手管始』(1789年上演)の例で、彌五から小女へ応答している場面である。『韓人漢文手管始』では、「いかにも」は全部で21例見られるが、すべてこのような「応答」の場面での使用で、かつ男性の発話に限って用いられていた。「応答」での「いかにも」の用いられる範囲は、徐々に狭くなり、現代語のように「古風なニュアンスのある語で、くだけた会話ではあまりもちいられない」(『現代副詞用法辞典』)ものとなっていったと考えられる<sup>12)</sup>。

## 5. 他の不定語との関わり

不定語の一形式であった「いかにも」は、評価副詞や程度副詞へと変遷を遂げた。この変遷に関わるものとして、『天草版平家物語』の次の例が興味深い。

(30) a ただ一所でなんとも (nantomo) ならうずると言うて、宇治、瀬田の手をも皆呼び返された。 (天草版・179)

b 平家はヲ聞テコハイカ、スヘキ只一所ニテイカニモ成シトテ宇治瀬多ノ手ヲモ皆呼ソ (百二十句本・450)

(31) a 宗盛なんとぞして (nantozo xite) 在りつけうずると思はれたによって、  
(天草版・119)

b 右大将イカニモシテ在セ付ハヤト思レケレハ、 (百二十句本・261)

(32) a ただし駆け合ひの合戦はなんとしても (na'to xitemo) 勢の多少によること  
とぢゃ (天草版・164)

b イカニモ勢ノ多少ニヨルコトナリ (百二十句本・425)

(30) a (31) a (32) a が天草版、(30) b (31) b (32) b がそれに対応する原拋本の本文である。これを見ると、原拋本で「いかにも」とある箇所、天草版では「何とも」「何とぞ」など、他の不定語の形式が用いられているのである。原拋本には「いかにも」が51例見られるが、そのうちの4例が、天草版では(30) aのように「何とも」となっていた。また原拋本の「いかにも」のうち8例が、天草版では(31) aのように「何とぞ」となっており、さらに4例が、天草版では(32) aのように「何としても」となっていた<sup>13)</sup>。このような例が見られることから、「いかにも」の従来表していた領域に、他の不定語が用いられるようになった、ということが推測される<sup>14)</sup>。

室町期の他の資料でも、「いかにも」は従来の用法である「否定」「任意」では、あまり用いられなくなる。そして、これらの用法では、他の不定語が用いられるようになる。

(33) a 人ノ死事ヲ何トモ思ハヌソ (毛詩抄・二・16ウ)

b 手ト手トヲ取テ何トモシテ死ナヌ様ニシテ年ヨル迄申合セテ終ウスソ  
(同・二・16オ)

(33) ab は『毛詩抄』(1539年成立)に見られる「何とも」の例である。(33) a は「何とも思わない」と、「何とも」が「否定」で用いられており、(33) b は「どのようにでもして」という「任意」で「何とも」が用いられている。

「何とも」は中古から用例が見られる形式で、『毛詩抄』には31例見られるが、そのうち、24例が「否定」、5例が「任意」、1例が「専一」、残りの1例が程度副詞として用いられていた。これは、「いかにも」が「専一」用法を獲得する前後の資料における用法の分布状況(表1・表2)と類似している。先述したように、『毛詩抄』をはじめとする室町期の資料では、「いかにも」は程度副詞として用い

られることが多く、「否定」「任意」用法ではほとんど用いられない。「何とも」など他の不定語が「いかにも」の従来の用法の領域を表すようになり、「いかにも」とこれらの形式の間には用法の棲み分けが生じたのではないだろうか。

筆者はかつて、松本(2004・2005)で、室町期を中心に「何たる」「何と」と「いかなる」「いかに」の様相について考察を行った。その結果、中世以降「何たる」「何と」という何系不定語が、古い「いかなる」「いかに」の領域を侵していることが明らかとなった。「いかにも」の変遷と、「何とも」など他の不定語の形式の進出の間にも、「いかなる」「いかに」と「何たる」「何と」と同様に密接な関連があると考えられる。「何とも」の変遷の様相も踏まえて、今後さらに明らかにしていきたい。

## 6. まとめ

以上みたように、「いかにも」は、古くは事態の成立や存在などを打ち消す「否定」と、「どれでもかまわない」という「任意」の二用法で用いられた。これは、不定語「いかに」が「選択の対象となる要素の集合」である前提集合を持ち、これに助詞「も」がつき、「どれもあてはまらない」と全称否定する場合は「否定」、「選択肢のどれでもよい」と、選択を放棄する場合には「任意」といった意味が生じるものである。また「任意」の場合、「どのような状態であれ」とか「方法、手段を選ばず」という形で、下につづく「希望」「意志」「命令」などの表現を強調することもある。この段階での「いかにも」は、不定語としての性格を色濃く持つ形式であった。

その後、「任意」は、「選択そのものに意味がない」「選択の余地がない」などという意味に転じ、「Aと結びつくのはBのみだ」という断定を示す「専一」用法で用いられるようになる。さらに、「専一」の意味が、「まさに～だ」「とにかく～だ」という話し手の事柄への評価を表すところから、状態性述語の程度を強調する程度副詞に分化して用いられるようになった。

明治期以降の「いかにも」は、「らしい」「ようだ」などの形式と共起して、「典型一致」で用いられることが多くなり、現代語での様相へと連なっていく。「典型一致」は、「専一」の一バリエーションであると考えられ、一旦「専一」の「い

かにも」が程度副詞へ分化したものの、ふたたび程度副詞では用いられなくなったあとに、残った用法であろう。

また、「専一」用法は、近世以降、応答の場面で用いられるようになる。

このように「いかにも」は、多様な用法の変遷を経て、現代語のように用いられるようになった。その変化は、不定語「いかに」の持つ「前提集合」と助詞「も」の働きによる「否定」「任意」を出発点に、「専一」「典型一致」を表す副詞、さらには程度副詞へと分化したものと説明できる。

この変遷に関連して、室町期の資料では、「いかにも」の従来の領域に「何とも」「何とぞ」「何としても」など他の不定語の形式が用いられていることが明らかとなった。不定語全体の変遷とその中での「いかにも」の位置づけについては、今後さらに明らかにしていきたい。

#### 用例出典

土佐日記・蜻蛉日記・落窪物語・源氏物語・和泉式部日記・栄花物語・更級日記・浜松中納言物語・狭衣物語・夜の目覚・大鏡・讃岐内侍日記・梁塵秘抄・宇治拾遺物語・平家物語（覚一本）・古今著聞集・大経師昔暦・鍵の権三重帷子・傾城壬生大念佛・東海道中膝栗毛・勸進帳・韓人漢文手管始……『日本古典文学大系』岩波書店  
 宇津保物語……『新日本古典文学全集』小学館  
 とりかへばや物語……講談社学術文庫  
 平家物語（百二十句本）……『百二十句本平家物語』汲古書院  
 平家物語（竹柏園本）……『天理図書館善本叢書 平家物語竹柏園本』八木書店  
 蒙求抄・毛詩抄……『抄物資料集成』清文堂  
 天草版平家物語……『天草版平家物語語彙用例総索引』勉誠出版  
 エソポのハブラス……『エソポのハブラス 本文と総索引』清文堂  
 大蔵虎明本……『大蔵虎明本狂言集の研究』表現社  
 大蔵虎寛本……『大蔵虎寛本 能狂言』岩波文庫  
 好色一代男……『新編西鶴全集』  
 『嘶本大系』（東京堂出版、1976年）  
 『北越雪譜』『当世書生氣質』……岩波文庫  
 あいびき・浮雲・たけくらべ・金色夜叉・吾輩は猫である・阿部一族……『明治の文豪』

## 註

- 1) 例えば、述語に対する補充の関係から、修飾の関係へと変化する、などの指摘は、他の不定語にも見られる変遷であり、重要である。
- 2) 「いかにも」は仮名書きの他に、「如何ニモ」「何ニモ」などの表記が見られる。このうち「何ニモ」と表記された場合、「ナニモ」と読むか「イカニモ」と読むか、確定できない。本稿では、これらの表記による用例については参考程度に留めている。以下表記については「いかにも」で統一する。
- 3) 尾上(1983)による分類のうち、「事態中のその部分は特定しなくても良いのだ、あるいは特定しようにもできないのだ」ということを主張するような場合<sup>1)</sup>である「特定・明確化不志向系」の中の、「否定」と結びつく各タイプが、本稿での「否定」に当たる。また、「一つの事態の条件的部分にX項があって、そのX項に何が代入されても結論は変わらない」という「条件一般化用法」が、本稿での「任意」に相当する。
- 4) 「専一」は「任意」と連続的で、用例から判断しがたいものも多い。ここでは、文脈上、明らかに「専一」の意味で解釈されるものを数えている。
- 5) 「いかにも」が、「専一」用法を獲得する過程については、「否定」からの連続性も考えられる。

・ うり物などもたせて、きてみるに、いかにもわづらはしき事なし。

(宇治拾遺物語・大太郎盗人の事・119)

これは「少しも気味の悪いことはない」という意味で、「煩わしいことは一つもない」という本来の「否定」用法の他に、「気味が悪くない」状態が「確かである」ことを「いかにも」によって強調しているようにも見える。「否定」用法の変遷についても今後明らかにしたい。

- 6) この現象を考えるにあたり、「いかにも」がしばしば副詞「ただ」と共起するということが参考になる。

・ たごおぼされんまゝに、いかにもし給へ」といらふれば、

(宇治拾遺物語)

・ いかなる事にや、いかにもして、うたせまいらせんと思ひし事、たごひとへに御身故ぞかし」と語ければ、

(曾我物語)

副詞「ただ」についても、1のように「格別に扱うような状態ではないさま」(『日本国語大辞典』)といった「任意」に近い意味と、2のように、「それ一つを取り立てて限定する。それよりほかのことなく。もっぱら。いちずに。ひたすら。)(同)という「専一」との二つの意味を表すことができる。「ただ」と「いかにも」は共起しやすいことから、両者の性格には類似した面がある、と考えられる。

- 7) 本稿では、原拠本を  
 巻第一～四……覚一本  
 巻第五～七および巻第九～十二……百二十句本  
 巻第八……竹柏園本  
 とする。
- 8) このような評価副詞と程度副詞の交渉は、例えば、「実に」といった形式の変遷の過程にも見ることができる。(工藤 1983、松井 1977) 現代語では、「実に」は次のように程度の甚だしさを示すことが多い。
- ・ 高感度は、ISO400 までは実に素晴らしい画質だ。  
 (<http://digicame-info.com/2010/11/e-5-8.html> 2010/11/28)
- この例では「すばらしい」という状態が「実に」によって程度強調されているようにみえる。しかし、さかのぼって明治期には次のように用いられることが多かったようである。(松井 1977)
- ・ 西洋人に実に日本をとらふといふ念があれば (交易問答・松井 1977 より)
- この例の「実に」は、本来の「事実、実際に、真実のところ」の意味で、話し手が事態に対して「真実である、事実である」とする評価副詞である。「実に」は、評価副詞から程度副詞化した一例であると言えよう。
- 9) 表中に「典型一致」としたのは、「らしい」「ようだ」「～と見える」といった形式が共起して、明らかに「典型一致」の意味で解釈される例である。
- 10) 虎寛本の「応答」の「いかにも」は、虎明本では「中々」とある箇所と対応することが多い。「中々」との関連についても、今後考察していく必要がある。
- 11) 現段階の調査で収集した「応答」の例では、相手の発言に対して、「いかにも」を用いて応答する人物は、その内容についての知識を既に持っており、それを再確認する形で相手への同意を示すことが多い。話し手自身の知識ではなく、相手の知識に対して「いかにも」で同意する例が見られるのか、さらに詳しく考察していきたい。
- 12) 「応答」の使用場面の偏りについては、他の形式との関係などが要因としてあると考えられるが、現段階では明らかではない。
- 13) 原拠本に見られる「いかにも」が天草版では「何とも」になっている 4 例中 3 例が「何ともなる」の形で、「死ぬ」ということを表す定型表現であった。また、天草版で「何とぞ」となっている例は、すべて「何とぞして」の形であった。天草版「何としても」となっている 4 例は、否定を強調した例が 1 例、話し手の推量と結びついた例が 3 例であり、形式などに偏りは見られなかった。この他に、原拠本で「いかにも」とある箇所が、天草版で「ともかくも」となっている例が

## 2 例見られる。

- 1 a ただ都のなかでともかくもならうものと言うて、宗盛の方を見やって、  
世にもうらめしさうに…… (天草版・189)
- b 只都ノ中ニテイカニモナルヘカリツル物ヲトテ、大臣殿ノ方ヲ見遣リテ、  
ヨニモ恨シケニ思レタリ (百二十句本・463)
- 2 a さござればこそただ一所でともかうもならせられいとは申したは  
(天草版・215)

- b 一処ニテ如何ニモ成セ玉ヘト申候ツルハ…… (竹柏園本・108)

いずれも「任意」用法で用いられたものであり、当時「ともかくも」が「任意」で用いられていたことが伺える。これらの形式との関連についても今後考察して行きたい。

- 14) ただし、原拋本にあるすべての「いかにも」が、天草版で他の表現となっているわけではない。天草版でもひきつづき「いかにも」が用いられることもある。

- 1 a いかに兼平、木曾は今日六条河原でいかにもならうずることであつたれども、  
幼少から一所でいかにもならうと (icanimo narōto) 契つたことが思はれて、  
(天草版・243)
- b 今井殿、義仲ハ今日六条河原ニテイカニモナルヘカリシカトモ、幼少ヨリ、  
一所ニテイカニモ成ント契シコトカラモハレテ、 (百二十句本・494)
- 2 a 心ばかりはいかにもして (icanimoxite) 流罪を申し宥めうとは思はれたれども、  
頼朝許さねば…… (天草版・370)
- b 心許ハイカニモシテ流罪ヲ申有ハヤト思ケレ共、鎌倉殿免サレモナケレバ  
(百二十句本・733)
- 3 a 今度はいかにもかなふまいと (icanimo canōmaito) 思はれたか、薄墨といふ馬に乗って、  
播磨の明石へ落ちられ…… (天草版・273)
- b 今度ハイカニモ叶ハジトヤ思ハレケン、薄墨ト云馬ニ乗テ……  
(百二十句本・538)

これらの例では、天草版、原拋本いずれも「いかにも」とあり、このような例が全部で22例見られる。このうち「いかにもなる」の形で「死ぬ」ことを表したものが10例、「いかにもして」という形が7例、「いかにも叶うまじ」の形で用いられたものが4例と、この三つの形が大半を占めている。この三つにあてはまらないものはわずかに1例のみであった。「いかにも」は、ある程度定型的な表現に偏って用いられるようになったのではないかと、ということがうかがえる。

## 参考文献

- 奥津敬一郎（1984）「不定詞の意味と文法——「ドッチ」について——」『都大論究』21  
（『拾遺日本文法論』ひつじ書房（1996）に再録）
- （1985a）「続・不定詞の意味と文法」『人文学報』173（『拾遺 日本文法論』  
ひつじ書房（1996）に再録）
- （1985b）「不定詞同格構造と不定詞移動」『都大論究』22（『拾遺 日本文法論』  
ひつじ書房（1996）に再録）
- 尾上圭介（1983）「不定語の語性と用法」『副用語の研究』明治書院
- 清瀬良一（1982）『天草版平家物語の基礎的研究』溪水社
- 工藤 浩（1983）「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』明治書院
- （1996）「「どうしても」考」『日本語文法の諸問題』ひつじ書房
- 中川祐治（2007）「「いかにも」の語史——副詞の文法化の一類型——」『国文学攷』  
192・193 合併号
- 松井栄一（1977）「近代口語文における程度副詞の消長——程度の甚だしさを表す場  
合——」『松村明教授還暦記念国語学と国語史』明治書院
- 松本朋子（2004）「中世室町期を中心とした「いかなる」と「何たる」の様相」『和漢語  
文研究』2
- （2005）「中世室町期を中心とした「いかに」と「何と」の様相」『和漢語文研究』3
- 森重 敏（1957a）「不定系の発始としての係副詞」『国語国文』26-1
- （1957b）「不定系の係りとしての係副詞」『国語国文』26-3
- 山口堯二（1990）『日本語疑問表現通史』明治書院

附記:本稿は、2009年3月に京都府立大学大学院文学研究科に提出した博士論文の一部を、大幅に改稿したものである。執筆に際して、学内外の多くの先生方に教示を賜りました。記して深謝申し上げます。

<キーワード> 不定語、いかにも、副詞化

## The Historical Change of “Ikanimo”

Tomoko MATSUMOTO

In modern Japanese, “ikanimo” is used as an adverb which expresses accordance of type. But in ancient times, it was also used differently. Its usage has changed in various ways before it reaches its modern usage.

In the oldest stage, “ikanimo” was used to express “negative” or “optional.” This has something to do with the fact that “ikanimo” contains elements of the indefinite word “ikani”. Concerning the set of assumptions which an indefinite word expresses, when it means “not...any”, it is negative. When it renounces the choice and means “any”, it is optional.

Furthermore, “ikanimo”’s meaning changed from “optional”, to “exclusive” — “There is no other option.”, “A is related to only B.”.

After that, “ikanimo” became an adverb of degree which emphasizes predicate, and finally it has come to be used as an adverb which expresses accordance of type.

This change of “ikanimo” is also related to other indefinite words “nanitomo”, “nanitozo”. This change can be located in the system of indefinite words.